

作文の部



建設業の魅力とは

名古屋市立工芸高等学校 建築システム科 3年
竹 内 ころろ

つい最近SNSで、建設現場で働く人達のことを“品がない”“汚い”と馬鹿にするような発言を見かけた。私は現場で働く人達を「汚い」などと思ったことなど一度もない。むしろ「格好良い」と思っているし、尊敬さえしている。だから悪く言う人達の言葉が理解できなかった。

建設業に対するマイナスのイメージもある中、「建築女子」「土木女子」という言葉が出てきたりと、建設業界の中でも女性の姿が見られるようになった。それは、女性たちが建設業界に何か魅力を感じるものがあったからだろう。

私自身も「建築女子」の内の一人である。

私は昔から、工事をしている様子を見るのが好きだった。道路を直しているところ、家を立てているところを発見しては立ち止り見ていた。囲われて中が見えないときは隙間から覗いたりもした。子供ながら建設業に興味を持っていたのだと思う。職人さんたちの姿を見て、格好良いと目をキラキラさせていた。

他にもハウジングセンターへ見学へ行ったら、外見や間取り、床や壁の材料の違いを見て回る事が好きだった。「興味」から「夢」へと変わったのは中学生になってからだ。父が仕事の関係で使っていたマイホームデザイナーをたまたま見つけ触らせてもらったことがきっかけだった。自分で間取りから考え作業を進めていくうち、単純だが「将来は建築家になりたい」と思った。そして建築について学ぶべく、工芸高等学校へと進学した。

初めは「建築家になる」という漠然とした夢だった。リフォーム番組を見るのも好きな私は、出演している建築家の人達を見て、自分もこうなりたいと思っていたのだ。そもそも「建築家」をよく知りもせず、勉強すればなれるものだと思っていた自分。それは大きな間違いであると当時の自分に言ってやりたいものだ。「建築家」になることの大変さを知った今「建築家になる」と言うのと、前とでは重さがかなり違ってくる。

学ぶにつれ知った建設業の幅広さ、奥深さは想像以上のものだった。私達が住んでいる家はもちろん、学校など多くの建築物、道路や普段通学で使っている鉄道など、多くの人々によって作られ支えられている。専門の知識・技術を持つ人達によって私達の暮らしは支えられているのだ。

二年生に製図コースへと進んだ私は、まず設計の大変さを知った。指定された敷地の中に決まった面積で設計していく。自由とはいえ、思い通りにいかなくてかなり苦戦した。小さな家一つ考えるだけでもこんなに大変なのに、もっと大規模な建築物を設計している人がいるなんて想像もできなかった。

丁寧に描いてはいたが人よりもかなり作業の遅い私は、一枚描くのが精一杯。もしかしたら実技系の方が向いているのではないか。そう思った私は、せっかくだから実技の方も学んでおきたいと、三年生は実技コースへ。一年分他の生徒よりも知識的にも技術的にも劣るものの、それほど気にはならなかった。実技コースで測量や鉄筋組みなどの実技を学び、改めて建築というものの大変さを感じた。

一年生の測量ではやっていない細部測量。思った以上に細かく地道な作業。そして鉄筋の結束。印付けから、結束し組み立てるのを二人一組や、四、五人のグループで作業を行う。数人で作業をしていても決して早いとはいえない。それを、このくらいならば現場では一人で行なうこともあると聞き驚愕した。小さい頃から見ていた人達がどれほど凄い人達なのかを、自分で作業して初めて知ることができた。

私は学んでいるから「建設業」の大変さ、素晴らしさが分かるのであって、本当に興味の無い人にはあまり分からないのだろう。「汚い」などというイメージが強く出てしまうのは、多くの人がほんの一面しか見ていないからではないだろうか。そして、その一面がマイナスの面であれば、マイナスのイメージが定着してしまうのは仕方のないことではないか。態度や服装、一人が何か一つでもマイナスの部分を持っていれば、全体のイメージもマイナスになってしまう。一つ一つの現場でそれがなくなれば、建設業全体のイメージも少しは良くなるのではないだろうか。固い文章で「建設業の良さ」を説明されるより、実際目で見えたものの方が判断基準としては大きい。

全ての人に建設業について理解を求めるのは難しいことかもしれない。それでも、プラスしかなければマイナスへ向かうことはなくなるはずである。

私は、土や泥にまみれながらも働く人達のことを「汚い」などと言ってほしくない。その人達の流す汗は、私達の暮らしを、未来を築いている命の水だと私は思う。